特集

創刊120周年記念

『幼児の教育』120年。未来に何をつなぐのか 4

1901（明治34）年、『幼児の教育』は『婦人と子ども』という誌名で産声を上げました。
以来120年、本誌は変わりゆく日本の幼児教育・保育を見つめてきました。
この120年の間に、子どもも変わったのでしょうか。
あるいは、子どもは子ども、いつも変わらずにそこにいるのでしょうか。
今年は、「120年の大人と子どもの関係」を本誌の歴史と共に振り返っていきます。

今回のテーマ：

散歩の意味をとらえ直そう
― 戸外の保育が学びをひらく

15 年ほど前から、子どもの「安全・安心」を守る機運が高まり、それ自体は良いことなのですが、子どもにとっては自由に過ごせる時間と空間が少なくなりました。さらには、昨年からのコロナ禍で「ステイホーム」が繰り返され、子どもたちも、なるべく家にいることを余儀なくさせられています。そんな今だからこそ、あらためて、戸外に出ていくことの意味について、しっかり考えておきたいと思います。
今回は、さまざまな現場で子どもと戸外に出かけている実践者の皆さんと「戸外」「散歩」「自然」をテーマに語りあいました。

座談会2021

散歩の意味をとらえ直そう

久保健太
坂本喜一郎
野村直子
宮里暁美
（発言順）

それぞれの思い

久保　本日は、『幼児の教育』が120周年を迎えたことを記念する特集のひとつとして、戸外の保育、散歩、自然をテーマに、皆さんと語りあいたいと思っています。

喜一郎　初めまして。私は東京都世田谷区の岡本という所でRISSHO KID'S きらり 岡本という保育園の園長をしています、坂本喜一郎と言います。今日は初めての先生ばっかりで、ワクワクしています。よろしくお願いします。

野村　宮里先生、お久しぶりです。皆さま、初めまして。new education LittleTree の野村直子と申します。私は森のようちえん全国ネットワーク連盟の立ち上げ期から理事として携わってきた経緯もあり、子どもたちが自然の中で過ごしながら育つということにかかわってきました。小さな保育室での園長の経験もあり、今は、東京の亀戸と横浜市神奈川区にある「わくわくbase」という企業主導型保育室で顧問をさせていただいています。ほかには、保育園、幼稚園の先生方への研修をしたり、自然を取り入れた保育を推進するような活動をしています。よろしくお願いします。

宮里　野村さんとは昨年、東京都版保育モデルの検討という仕事でご一緒しました。自然とのかかわりが豊かになっていくように検討していったのですが、そこで野村さんが取り組まれていることがすてきだなと思って、今回一緒に語りたいと思ってお誘いしました。

久保健太（関東学院大学）
野村直子（new education LittleTree）
坂本喜一郎（RISSHO KID'S きらり）
宮里暁美（お茶の水女子大学）

新しく喜一郎さんとも出会えて、この4人で語りあえることをうれしく思っています。なんか新しい感じがして良いなと思っています。

以前勤務していた東京の目黒区立ふどう幼稚園は、園庭のない幼稚園でした。でもすぐそばに都立林試の森公園があって、そこを頻繁に利用したことで気付きがたくさんありました。今はお茶大の中にある文京区立お茶の水女子大学こども園にかかわっていますが、ここも園庭がほとんどなくて、キャンパスを園庭にして遊び尽くすという保育をしています。「ないけれど、ある」みたいな感じがする場所にいると、気づくことが多いなと思います。

久保　あらためまして、皆さん、こんにちは。私は関東学院大学というところで保育者を養成している者です。保育者養成の学校に着任したことがきっかけで保育の世界にもかかわり始めましたが、もともとは街づくりの研究をしていました。その時は、野天の遊び場を研究していて、園庭がなくても、出かけていくことで園庭以上の自然に出会うことができるのではないかということを考えていました。喜一郎先生がそうした保育を実践されていましたので、今日お話を伺えたらと思ってお声をかけさせてもらいました。

自然と子ども

野村　私は10年ぐらい前から、幼稚園、保育園の先生方への研修を始めました。もともと私も保育士だったのですが、大人が設定したプログラムを提供して『遊ばせる』保育をしていると、子どもから「早く遊びたい」と言われるというジレンマを感じていました。

近所のただの原っぱに子どもを連れて行ったときに、ものの10分で自由に遊び始め、自ら遊びをつくり始めた姿を見たときの、その子どもの可能性への驚きが今の活動のきっかけになりました。今は、幼稚園や保育園の先

生方に子どもたちと一緒に自然体験を楽しんでもらいたいと思って活動しています。

研修では写真（右）のようにネイチャーゲームを取り入れて、先生方に「自然って面白いな、楽しいな」と感じてもらう体験をまずはしてもらいたいと思い、取り組んでいます。

以前は放課後のプログラムも行っていまして、3、4、5歳の子どもたちが幼稚園が終わってから集まって森の中で思いきり遊ぶ活動をしていました。

地域の資源を活用する

喜一郎　普段皆さんにお見せしている写真をお見せしますね。これ、クイズです。どこの海だかわかります？　私が最も好きな海なんですよ。きれいなんですよ。透明感があって、生き物がたくさんいますし。

宮里　東京からそんなに遠くないですよね。

喜一郎　遠くないです。ここに写っているの、うちの園の子どもたちなんです。年長。

宮里　神奈川県？　猿島？

喜一郎　惜しいです。

久保　猿島より近いんですか？

喜一郎　岡本の園ができる前は、神奈川県相模大野のRISSHO KID'Sきらり（以下、きらり）という園で園長をしていたんです。

写真の海は江の島です。島の裏側の磯なんです。きらりは、

▲坂本喜一郎氏

「水遊び」＝「江の島に行く」という感覚なんです。

きらりができたのが10年前です。園庭のない、駅から10分ほどのテナントの保育園だったのですが、そこからスタートして良かったと思っています。

園庭がないと「かわいそう」と言われるし、園庭がないだけで〝残念な保育をしているんじゃないか〟〝テナントだから子どもを行かせたくない〟という先入観が嫌で、どうやったら覆せるかを考えていたんです。

職員たちと一緒に、「テナントで園庭がなくてかわいそう」と言われるのであれば、テナントで園庭がなくても最高に魅力的な保育ができるということを立証しようとつくったのが、きらりの始まりなんです。

園庭の代わりに地域の資源を積極的に活用する。先ほど宮里先生が隣の公園を活用されたとおっしゃっていましたが、僕もそういったことを大切にしたいと思っていました。

久保　地域の資源というのはキーワードですね。

喜一郎　今は世田谷区の岡本という場所で新しい保育園をしています。そこでは夢だった広い園庭を造れたんです。でも園庭があるからといって、園外に出ていくことは全くやめていません。相模大野のきらりのときからの伝統で、地域を使うということを続けています。

自転車で地域を動き回る

久保　保育の中で自転車に乗っていますね？

喜一郎　僕はサイクリングが好きなんですね。子どもたちに「園長先生の夢はみんなとサイクリングに行くことなんだよね」って伝えています。（笑）

子どもたちが公園で自転車に乗るようになって、僕のテストに受かった人たちはサイクリングチームになれるんです。そのチームで、相模大野から江の島まで自転車で行くんです。32キロを6時間かけて、遊びながら行きます。呼びかけたわけではないのですが、親も来てくれます。15人の子どもと15人の親と、引率の先生7、8人なので、40人規模で走っている。

野村　自転車は園で用意しているんですか？

喜一郎　違うんです。園には三輪車と一緒に自転車が置いてあるんです。みんな最初は、三輪車に乗るんですが、そばに自転車がさりげなく置かれていて、それに憧れて、子どもが乗り始めるようになっていくんです。

乗れるようになったら、私のテストを受けられるのですが、そのテストに合格するとカードがもらえて、毎日登園するときに自分の自転車で来てよいんです。自分の自転車で園に来て、その自転車が園に並ぶ。自慢大会が始まる。俺の自転車格好いいだろうみたいな、そういう世界なんです。

この自転車チームも地域資源の活用のひとつなのかなって。たまたま僕の夢から始まったことではあるのですけれども、今は子どもの夢、文化になっている感じですかね。

久保　自転車の取り組みはいろいろと苦労もあったのでは？

喜一郎　今でこそ当たり前の文化になっているので抵抗ないんですけれども。相模大野で始めたときは、安全に配慮しました。街中なので危ないんですよね。安全な職員配置とか、引率できる子どもの人数とか。

海・川・山・サイクリングは、園外での気

を使うビッグ4ですね。なので、必ず園長である私が引率するという、そういう体制でやってはいます。職員も楽しんで子どもと一緒にやってくれるので、やりがいはあります。

地域の本物と出会う

喜一郎　ただサイクリングをやればいいというものでもないんです。サイクリングを通じて出会える地域の「本物」が素晴らしいんです。

　例えば、相模大野ではインドの本物に出会いました。雨の日に、子どもが「雨の日じゃないと行かれない場所に散歩に行きたい」と言って、行った先が駅ビルのレストラン街だったんですよ。レストラン街を歩いていたら、子どもたちがインド料理のディスプレイに目を留めて、お店の前でナンを見ながら、「何だこれ！　何だこれ！」と大騒ぎしていたら、中からインド人の店員さんが出てきてくれたんです（**写真下**）。

　そこからインドカレーに興味をもち、インドカレーの研究を子どもがしていくんですけれども、最後はインドのことが好きになって。インドのダンスを覚え、インドの衣装を作るとか、ヒンドゥー語を話し始めるとか。

　地域でさまざまな環境や人と出会うことによって新しい学びの気付きが生まれたり、そこの積極的なかかわりの中で、小学校でいうところの生活科・総合学習につながるような、遊びを通して学ぶということを、自然にやっていたんです。

　そういう学びを大切にしたいという思いがあって、園の中でできることはやるんだけれども、園の外だからこそできることも大切に

しようと、室内でも園外でも大切にしてきたという経緯があります。

宮里　面白いですね！　インド料理屋さんの人たちとの出会いがいいなあ。

喜一郎　インド。僕が言うのもなんですが、面白いんです。

　このディスプレイを見て大騒ぎをしていたら、予想もしないインド人の店員さんが出てきた。これがすべての出会いなんです。計画できない偶然が大切だなと。

セレンディピティ

宮里　「偶然」って好きな言葉なんです。保育って偶然の宝庫みたいだなと思うんです。ある時、5歳児クラスでバングラデシュに興味をもった子たちがいたんです。すごい数の人が伏せてお祈りしている写真を本の中で見つけて興味をもった。それがバングラデシュだったんです。その子たちがバングラデシュのことを調べていたら、そこにちょうど来ていた学生が驚いて「うちの両親は今バングラデシュの日本人学校にいます」と。それなら、といろいろ教えてもらったことがあります。これも偶然、でもそれだけではないような気がする。

　インド料理屋の前で「何だ！　何だ！」と言っていたらインド人の店員さんが出てきたように、運が良いだけというよりは、「何だ！」と声に出すという動きをするから出会えるという感じ。これを「セレンディピティ」、幸運な偶然に巡り合う能力、と呼ぶ。子どもや保育者がいろいろなものに関心をもって、扉を開くから、面白いことが次から次に飛び込んでくるのかなと思ったんです。

あらためて「戸外」の大事さ

久保　園外に出ていくときに大切にされていることはありますか？

▲野村直子氏

野村　今、宮里先生がおっしゃっていたセレンディピティって、私も大事と思っています。偶然性は室内環境よりも自然のほうが、園庭よりも園外の自然環境のほうが、出会う確率が高いと思います。

私が大事にしているというか、面白がっているのは、子どもたちの反応です。子どもが自然の中でどこを見ていて、何を発見していて、どんな心の動きがあるのかを観察することが、私自身が好きだし、楽しい。

子どもが何かを感じる前にあまりに大人が「ほらほら、これこれ、触ってごらん」としないように、子ども自身の発見や気付きを大事にするようにしているかもしれないですね。

宮里　心に残っているエピソード、あの時、面白かったなというエピソードありますか？

野村　鎌倉の森の中で活動をされている方の所に見学に行ったときに、3歳児の低月齢の子が、森の中を2人で歩いていたんですね。12月の落ち葉の時期で、湿地帯の上に落ち葉が降り積もってふかふかしていたんです。

子どもが2人で、「ここ、ふかふかするね」「ふかふかするね」「面白いね」「面白いね」って言いながら歩いていたら、私の後ろを歩いていた別の子がタタタタタと走ってきて、「ここは下に水があるからふかふかするんだよ」と偉そうに言ったんですね。私、ケンカになるかなと思ったら、先の2人が「そうなんだ」と。

私から見ても、偉そうな子の強い言い方を吸収した感じがあったんです。そうしたら、偉そうだった子が「そうだよ」と優しい言い方になったんです。

子どもだけの世界ではそんなふうに優しさが表現されます。もしそこで大人が「〇〇君、

そういう言い方しないの」と言っていたら、強い子が悪者になるけれど、子どもって自然の中でいろんなことを感じているから、ぶつかりあうのも柔らかくなるのかなと感じました。その姿が印象に残っています。

宮里　ふかふかな葉っぱのおかげで、気分までふかふかだったんでしょうかね。

野村　自然の中にいると、コミュニケーションが豊かになりますね。

宮里　目黒の幼稚園にいたとき、「入園当初の落ち着かない時期は行かれないよね」「子どもが落ち着いたら外に行こう」と言っていたのを、「落ち着かないから行こう」みたいに逆転させたことがあったんです。そうしたら、園内だとブロックの取り合いでどうしてももめ事になってしまう子が、一面の落ち葉を見つけて大喜びで突進していったんです。その時の、その子のうれしそうな姿を覚えています。

▲宮里暁美氏

園内の遊具はどうしても数が限られるので人が集中すると、あっちに行けって言いたくなるんだけれども、自然物は惜しみなくあるものだから寛容な気分になれる。一面の落ち葉の山でみんなが楽しんでいるのを見ても笑っていられる。当たり前過ぎるかもしれないけれど「受けとめる度量が広いな、自然は」と思ったのを思い出しました。

久保　自然を相手にすると、人間同士の取り合いじゃなくて、競い合いが始まりますよね。例えば、ドングリの数を競りあったり。

宮里　いっぱい集めたという気分に皆なれる。

久保　「このドングリでかいよ」「わあすげえ」って共有したり。

野村　そうそう。「どこにあったの?」って、また広がっていきます。

宮里　うれしい世界ですよね。

「散歩」をどう考える？

久保　散歩ってどう考えています？

喜一郎　僕は講演のときに、少し驚かせるように、「皆さんのイメージする散歩ってどんな散歩ですか？　当事者は散歩と思っていて、僕には散歩には思えない散歩があるんですけれど聞いてくれますか？」って話すんです。

で、「よく子どもたちが2人ずつ手をつないで先頭と最後尾に先生がいて、同じリズムで歩くことだけを強いられている散歩みたいな。僕はそれを〝移動の練習〟と心の中で思っているんです。子どもが立ち止まると、後ろの人が迷惑だから間を空けないで歩きなさいと言って歩いているのは散歩なのかな？」って。

久保　それにドキッとする保育者の人もいるかもしれませんね。自分たちの散歩は移動の練習だったのかもしれないって。

喜一郎　僕の中での散歩の定義は、「寄り道をする、立ち止まる」なんですよね。子どもたちがその子その子で興味があった瞬間に止まるじゃないですか。あの瞬間が学びの始まりじゃないですか。安全管理も大切ですが、先生たちが学びの始まりを摘み取っているのではないでしょうか。だから、この写真（右）のような姿こそ散歩の姿だと思っています。

もう一つ理解できないのは、「気分転換に行ってきます」っていう保育者の言葉。だから講演では、「とんでもない話ですよね。気分転換のために行くのは、あなたのためでしょ？子どもは気分転換なんて言葉は使わないし、そもそも子どもが散歩に行くことでイメージしているのは、いつもと違う所で思いっきり遊べるかもと思っているんでしょう？　この

感覚の違いって恐ろしいですよね」と笑いながら言うんです。

久保　笑いながら。（笑）

喜一郎　はい。子どもが自分の興味・関心で立ち止まれたり、寄り道できたりするのが散歩の醍醐味じゃないですか。寄り道から生まれる気付きとか学びのきっかけこそが、散歩の大きな意義だと思っています。

　だから僕は、脱線チックな、一見危なそうな、子どもの「何か面白いことがここにあるぞ」「何か楽しいことが始まりそうだ」という嗅覚が発揮される時間が散歩だと思っています。

宮里　完全に同感です。一歩歩けば何かが見つかるんです。だから、あの写真のような姿は私も大好きです。列で歩いている園のほうが多いけれど、立ち止まるほうを広げていけば、子どもはもっと幸せになるかもしれません。

地域の魅力を感じる

喜一郎　僕は、子どもたちのつぶやきを大切にしています。「もっと〇〇したいよね」とか「こんなことしたいよね」とかそういうつぶやきを楽しみながら、先生と子どもがパートナーになって、相模大野とか町田という地元を、地域を、散歩して楽しんでいたわけです。そうして子どもたちは無意識に地域の魅力を感じていると思うんです。僕はこれも大切な散歩の意義だと思っています。

　散歩は気晴らしでも単に遊びでもないし、散歩を丁寧に積み上げていくと地域の魅力に気づくんです。地域に生きることの素晴らしさを自然に感じていく魅力があって。これをやらないと、将来子どもが地域からいなくなると思っているんです。

久保　魅力を感じることや好きなことでつながるっていいですね。

喜一郎　本当にそうなんです。そこで知りあったばかりの子どもたち同士でもいざこざが起きない。それって気持ちがわかりあえるメンバーじゃないですか。そしてそこに融合しちゃった人たちだから平和以外の何ものでもないんです。

野村　散歩中、子どもたちとザリガニ釣りに夢中になっていると、お母さんと2人で来ていたお子さんがやりたそうに入ってきて、「やってみる?」と渡すと一緒になって遊んだりということも。どっぷり一緒になって遊んだりとかありますよね。

宮里　園内じゃない良さってそれですよね。思いがけない出会い。しかも、好きなものでつながる出会い。

100年前の「家なき幼稚園」

久保　ちょうど100年前に、喜一郎さんと野村さんと同じことを考えている、大阪の橋詰さんという人がいたことを紹介させてください。橋詰良一（雅号：せみ郎）さんという方が1922年の春に、大阪の池田市に「家なき幼稚園」という園をつくったんです。

その設立趣意書の一部を紹介しますね。

「家はなくても幼稚園はできます。生き生きした保育の方法を考えて行きましたら、家に囚われた幼稚園よりも、家のない幼稚園の方が幼児にとっても幸せかもしれません。家のあるためにその家にばかり閉じ込められたり、箱庭のような運動場にばかり追い込まれて、めったに野へ出ることも山へ行くこともできないような大阪あたりの幼児は不幸せです。（中略）工夫のつけかたによっては『家なき学校』でも立派にできるものだと考えていますが、保育にあっては特に『家なき幼稚園』

▲久保健太氏

が自由で簡単で愉快だと思われます。（中略）どうか『家なき幼稚園』の別項の『実行案』を御覧下さいまして、御会得が参りましたら御子たちの御入園を切望いたします。」

１００年前の文章なんですけれども、『幼児の教育』誌のバックナンバーをネット上で検索すると、第73巻（１９７４年）第2号から全13回で、橋詰さんの文章を紹介しています。「家」という言葉には現代とは違う意味合いがあると思います。当時は、お父さんが一番偉くて、父親の言うことを子どもたちは聞きなさいという時代です。大人が決めたことが絶対で、子どもたちはそれに従う存在だということが、「家」という言葉に込められているようにも感じます。

そのような「家」から子どもたちを解放する、閉じ込められている子どもたちを野に放つ、という橋詰さんの思想を、お二人にぜひ紹介したいと思い準備しました。

野村　橋詰さんの思想にはとても共感します。

喜一郎　いや、知りませんでした。とても共感します。

安全・安心の風潮の中で

久保　大人の管理下に子どもを置いて、安全・安心を第一にしようという状況は１００年前の橋詰さんの時代よりも強くなっているように思いますがいかがでしょうか。

野村　自然の中の活動をする上で、皆さんが懸念されるのはまさに安全の面ですね。

だけど私は、子どもたちを危険から遠ざけるだけが安全管理ではないと思っているんですね。子どもたちが自分でちょっと危ない体験をして、どうしたらここから落ちないかとか、どこの木が折れや

すいかとか、体験していかないと学び取れないところがある。側溝をのぞき込んだりとか、ああいう体験をしながら、子どももけがをしたくないので、危険を見抜いて避けるようになります。それをお伝えすると保護者の方も保育士さんも、そうだよねとうなずいてくれるけれど、実際にやるとなるとハードルが高いところがあるのかもしれません。

久保　確かにそうですね。

野村　先ほども言いましたが、家なき幼稚園の考え方にはとても共感します。100年前も発信されていた方がいらっしゃるということに、うれしさも感じました。

家の中、園内は人工的に作られているので、大人の発想からなかなか抜け出せないのでは、ということは私も感じています。自然のほうが季節によって景観も変わるし草木も変わるし、変化に富んでいて多様な体験ができます。

喜一郎　危険というテーマが今出ましたが、僕も全く同感です。きらりは、園庭代わりに地域資源を使って積極的に園外に出るって腹をくくったわけです。その時に職員に投げかけた言葉が「危なくなかったらやる、危ないからやらないという、『やるかやらないか』の白黒の選択肢しかないのか？　それだったら、最終的にはみんなやらないっていう答えを出すんじゃない？　もしくはできないっていう答えを出すんじゃない？　ほとんどの人は不安だから、できない理由を探すようになるよね？　じゃあやらないのと同じじゃん。リスクがあることは事実だけど、どうやったらリスクに付き合ったり回避したりしながらやれるか。どうやったらできるかを考えない限り、永久にできないよ」って、少し毒舌で呼びかけました。そして「どうやったらできるかを考えれば、アイデアが出てくるんじゃないの？」って言いました。

そこから園外に出ていく保育がスタートし

ているので。保護者にも同じことを伝えています。

久保　どうやったらできるかを考えましょうというのは大切なメッセージですね。

喜一郎　現在のコロナ禍の状況も良い例で、コロナだからやります、やりませんという選択肢は、きらりにはないんです。コロナだけれどどうやってやるかを考えるのが、うちの考え方です。どうやったらコロナの状況下でも安全に活動できるかということを考えて、今の子どもが最善の利益が得られるようにやらなければいけません。不安なのはわかりますが、それだけにとらわれて質を下げたり、子どもが豊かな経験ができないってことでもよいのですか？　そういう問いが僕の中にはあるわけです。

久保　とても大事な問いだと思います。

喜一郎　子どもの遊んでいる写真とか山登りの写真を入園前の説明会で親御さんに見てもらうのです。

「子どもの表情を見てください。本気でやっているとか、楽しんでいるとか、克服したいとか、ものすごく真剣に向き合っている表情を感じませんか？　これが子どもの成長のきっかけだと思いますよ。簡単にできることを簡単にできて良かったね、は確かに簡単で良かったかもしれないけれど、子どもって、ちょっと危険だったり難しいからワクワクしてやったりするんじゃないんですか。うまくやりたいって努力するんじゃないですか。そういう時、子どもってすごい集中力で、神経を研ぎ澄ませて活動をしているから、変なことはしませんよね。危険を感じながら慎重にやりますよね。だから事故がないんです。子どもが本当に向き合いたいと思うタイミングで海に入っているんです。だから海にはみんなで一緒に行くんです。でも、無理に子どもを海に入れることはしていません。海や危険と

どう向き合うかは本人が決めること。定期的に通うことで、好きになっていくんです。2、3回行くと海に入りたいと言うようになるんです。その子によってタイミングが違うから、やりたいというタイミングが出てくるように同じ場所に何回も通うことによって、その子が自分の興味・関心を広げて深めるチャンスをつくるというのが僕たちの仕事です。それが最終的にはリスク管理になっています」ということを保護者の方には伝えています。

地域のにぎわいをつくる

喜一郎　もう一つ。一年に1回ぐらいですが、地域の人からのクレームの電話が市に行くことがあります。内容は、「子どもたちが町を歩いている」というわけですよ。

　ただ、私が思うのは「町に出ているということは、子どもたちが新たな学びと向き合おうとしている」ってことです。町の大人一人ひとりが子どもを見守ろうという意識をもってくれていたら、危ないから出すなという発想にはならないと思うんですよ。

　逆に、良い学びをするために積極的に先生が園外に子どもを連れて出している。これを、安全に子どもが町で生活できるように応援しなくちゃ、という町にならないといけないんじゃないかと、保育園仲間と話しています。

　きらりの功績を自慢するとすれば、私たちの園が地域に出た結果、地域ににぎわいが起きたんです。うちの子どもたちがいつも町にいるんです。どこの公園に行っても、駅の周りにも、きらりの子たちがいるんです。そういうことを10年やった結果、地域の園が外に出るようになったんです。今、相模大野は子どもにあふれているんです。子どもが出ていいんだという雰囲気になったんです。逆に出ないと楽しくないじゃん、という雰囲気になってきました。

久保　にぎわいが起きるっていうのはいいですね。

喜一郎　私たちの役割は地域のにぎわいをつくることなんですよ。だから幼稚園、保育園に地域の子どもを囲い込んではいけないと思うんです。半分の時間は囲い込んでもよいと思うんですけれども、半分は地域でかかわるようにしないと、地域から子どもが消えますよ。

宮里　とても大切なことが話されたと思います。保育の場にいた人間として思うことは、喜一郎さんの話は熱を帯びていて、大きな変革を求める意見のようにも思えるけれども、私はほんの小さな意識改革ですっかり変わると思えることだとも感じました。

例えば、遠足に行くときも、楽しくてたまらないという人と行ったときと、しっかりやらなきゃという人と一緒に行ったときとでは、同じ遠足なのにすっかり変わりますよね。

園外に出ていくことの魅力と可能性について、今日の話し合いをきっかけに自分の中で問い直してみたいなと思います。お二人の話から刺激を受けて、うれしかったです。

久保　倉橋惣三が風光明媚な宝塚の家なき幼稚園と、ごく平凡な池田の家なき幼稚園とを訪れて、「『家なき幼稚園』を訪ふ」という記録を残されています（本誌第24巻第1号　1924年）。

そこで倉橋は、ごく平凡な池田のほうが普遍の典型でなければならないと書いています。倉橋は立派な環境がなくとも、ちょっとした工夫で変えられるということを言いたかったのではないかと思います。まさに今日、私たちがたどり着いた結論と重なります。

今日は長い時間ありがとうございました。皆さんとは今日をきっかけに折を見て集まりたいですね。また機会があったら、今度こそ対面で。喜一郎さんの園にでも集まりましょう。

（2021年7月7日　Zoomにて開催）